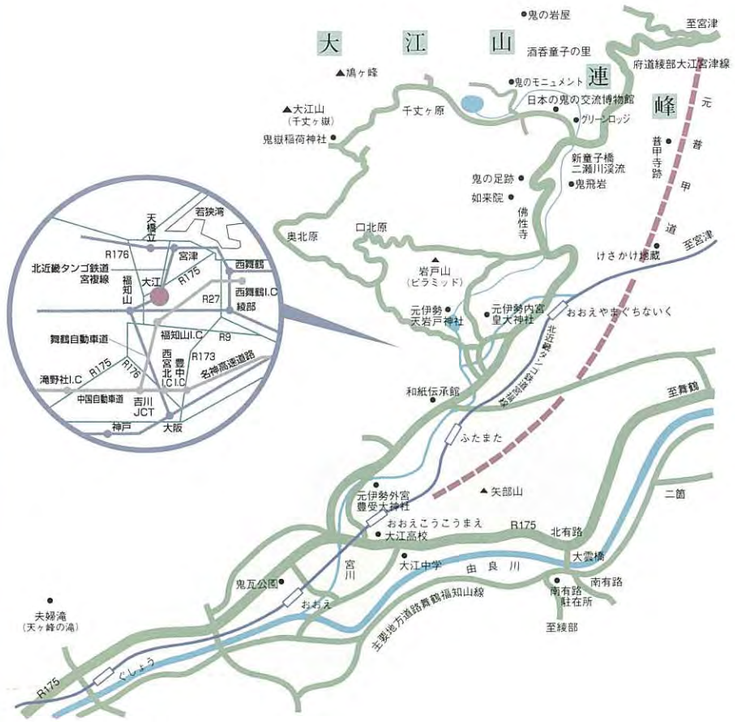
CIVIL JOURNEY
歴史街道を行く

神と鬼の棲む山へ

丹波路〈普甲峠〉

むかし丹波の大江山
鬼ども多くこもりいて
都に出ては人を喰い
金銀や財宝を盗みゆく……
中世より、
鬼の酒呑童子伝説の舞台として広く知られた大江山は、
京都から北西へ約100キロ。丹波と丹後の国境に位置し、
京の都と丹後を結ぶ丹波路の重要ルート、
決して避けては通れない峠越えの最難所でもありました。
古来、その秀麗な姿ゆえ神の棲む山として崇められ、
地域の人々の信仰の対象でもあった大江山が、
何故、鬼の棲む山になったのか……？
今回の旅では、伝説の謎をたずねて
大江山越えの古道・元普甲道、普甲峠をたどります。

普甲寺跡近くにたたずむ民家の土蔵



丹波路の最難所
大江山越えの峠道

大江山
いくのの道の
とをければ
まだふみもみず
天の橋立　　（小式部内侍）

百人一首に採録され人々に好んで詠まれた、この一句。もともとは11世紀の初め頃、都でもたれた歌合わせに呼ばれた小式部内侍が、母の和泉式部がそばにいないのでは歌も詠めまいとからかわれ、即興で応じた歌とされています。「大江山を越えて丹後へ向かう生野の道は遠いので、まだ天の橋立を踏んでもいないし、母からの文も見てはおりません」と。即興ながら歌枕の地を３つも詠み込み、踏みと文を掛ける鮮やかな技巧に、皆はさすが名高き歌人・和泉式部の娘と感心したといいます。その頃、和泉式部は、夫の藤原保昌に伴ってその任地・丹後国に滞在中でした。

今回の旅の目的地は、小式部内侍の歌や鬼の酒呑童子伝説で広く知られる大江山です。京都から北西へ約100キロ。大江山は、丹波と丹後を隔てる連峰で、千丈ヶ嶽とよばれる最高峰は833メートル。山がちで複雑な地形が多く、霧の名所、冬場はかなりの降雪地帯ともなる丹波、丹後の中でも、大江山山系はきわだって峻険かつ奥深く、大江山越えの峠道は丹後と京の都を結ぶ丹波路の最難所となっていました。

大江山越えの裏街道
元普甲道と普甲寺

通説では、いわゆる丹波路は京都七口の一つ丹波口を起点として、老ノ坂峠、亀山（亀岡）、八木、園部、観音峠、須知、水原を通って福知山に入り、さらに与謝峠、加悦を経て宮津に抜けていたと考えられています。この道筋は、福知山以北は現在の国道176号線とほぼ重なり合うもので、大江山山系の西の端を越えるルートとなっています。

しかし、丹波路には古くから、丹後の宮津、天の橋立に抜ける近道として、いわば裏街道ともいえる、もうひとつの大江山越えの道が存在していました。それが普甲峠を通って大江山の東の端を越えていく元普甲道です。元普甲道を往く人は、古代の花並駅（現在の福知山市榎木とされている）から花倉を経て現在の大江町に入り、元伊勢内宮から毛原、辛皮を経て普甲峠を越えました。そのルートにもっとも近いものが、現在の北近畿タンゴ鉄道のルートだと言われています。

元普甲道は丹後の宮津、天の橋立への近道であったばかりでなく、奈良時代から平安、鎌倉、室町の中期まで、天台密教の道場として繁栄した普甲寺への参拝の道でもありました。普甲寺は「今昔物語」にも登場する寺で、我が国最初の迎講会を行なった寺として知られています。

迎講会というのは阿弥陀仏の来迎を演じる法会のことで、「今昔物語」「沙石集」などの説話によれば、いまはむかし丹後の国の聖人が極楽往生を祈念するあまり、毎年大晦日に弟子を阿弥陀仏の使者に仕立て、これを聖衆の来迎に模していたところ、やがてこの行ないが国守の知るところとなってその知遇を得、迎講会を創始したとか。説話は、その聖人が迎講会の式場でみずから極楽往生を遂げるという結びになっています。

美しくも神秘的な山容を連ねる大江山は、密教の道場としてはうってつけの場所だったのかもしれません。元普甲道をたどって普甲寺に参拝し、天の橋立を見物して帰るというコースは、平安、鎌倉、室町期の都人の人気を集めていたようです。普甲寺は最盛期には一山百か寺と言われ、広大な寺領を持つ巨刹として栄えました。しかし、室町末期の戦乱に巻き込まれて消失し、今は寺跡を残すのみとなっています。

大江山連峰

普甲寺跡

廃道に今も仏の道を説く
袈裟切地蔵

大江山連峰の山麓を縫うように走る自動車道（府道綾部大江宮津線）の毛原峠から東へ、今は廃道となってしまった元普甲道をたどって山に分け入ると、「けさかけ地蔵」と呼ばれる小さなお地蔵さんがあります。剣豪・岩見重太郎が丹後の国の天の橋立で父の仇討ちを果たし、元普甲道を京に向かってまっしぐらに駆け戻る途中、一休みした毛原峠の地蔵堂の前で、間一髪、追っ手の逆襲から難をのがれたという逸話より、お地蔵さんの袈裟がかけたのは、重太郎防戦の際、大刀の切り先がふれたもの。もう人を斬ることならんというお地蔵さんの戒めでもある、と伝えられています。

時は寛永９年（1632年）。元普甲道はこの頃まで、丹後と京を結ぶ要路として広く利用されていました。この逸話の時代からほんの少し後に、丹後の国守・京極高広によって、新たな普甲峠越えの新道が開かれ、元普甲道は徐々に公道としての役割を終えることになります。

けさかけ地蔵

大江山酒呑童子伝説

大江山には数々の神秘的な説話、伝説が残されていますが、その決定版はやはり、日本の鬼伝説の代表作ともいえる酒呑童子伝説でしょう。

大江山の鬼＝酒呑童子を全国的に有名にし、600年も後の現代にまで伝えることになった「御伽草子」の「酒呑童子」をもとに、伝説の概要をたどってみましょう。

時は平安時代の中期、都の内外で次々と若い婦女子、姫たちがさらわれるという事件が起こる。陰陽博士に占わせると、それは「丹波国大江山の鬼神の仕業」だという。そこで帝から「大江山の鬼神を退治せよ」との命令が下り、源頼光が坂田公時、渡辺綱など少数精鋭の部下と藤原保昌をともなって山伏姿に身をやつし、大江山の鬼のアジトに潜入することになった。

頼光たちは大江山で、人間は決して行くことのないという鬼の岩屋をたずねて谷を渡り峰をよじのぼり、途中、神の化身の助けを得て、鬼の力だけを奪うという不思議な毒酒を授けられ、鬼の住む鉄の御所にたどりつく。昼間は人の姿の酒呑童子は頼光らを見ていぶかるが、頼光の作り話を信じて上へ呼び上げ、血の酒と人肉の肴を差し出す。それを何なくたいらげた頼光らに酒呑童子も気を許し、頼光の携えてきた酒をさしつされつ大酒宴。身の上話などをはじめる。

そのうち毒酒のせいですっかり酔っぱらった酒呑童子は寝所に引っ込み、残る鬼たちもみんな寝てしまう。そこで童子の寝所に押し入った頼光らは、再び神の助けを得て、世にも恐ろしい大鬼の姿に変じて寝ていた酒呑童子の首を切り落とし、他の鬼たちもことごとくに退治して、捕われていた人々を助け出す。

大枠ではこうした典型的な悪者退治の物語ながら、酒呑童子という鬼は、人情をわきまえた、なかなかに魅力的な鬼として描き出されています。最期の時に「鬼神に横道なきものを」と叫んだ酒呑童子とは、いったい何者だったのでしょうか。思わず想像の翼をのばしたくなってしまいます。

元伊勢外宮の入口

鬼の足跡岩

大江山の鬼とは何者だったのか？

地元・大江町の「日本の鬼の交流博物館」の館長で、郷土史研究家でもいらっしゃる村上政市さんにお話をうかがってみました。

一般に、酒呑童子物語は、南北朝の対立を背景として、北朝側に立つ足利将軍家の威光を誇示するために作られたと言われています。源頼光が酒呑童子を倒して、京の都の安寧を取り戻す話は、清和源氏の新たなる棟梁である足利家が、南朝を倒し、京の都を取り戻した史実と重なるというわけです。では、どうして物語の舞台が大江山に設定されたのでしょうか。

村上さんは、酒呑童子の住む鬼の城が、鉄の築地に鉄の門、鉄の御殿として描かれているところに注目し、酒呑童子の率いる大集団は、どこか製鉄民を思わせるという興味深い指摘をしています。実際、鬼伝説のあるところには、必ずといっていいほど鉱山があるといわれているのですが、大江山もまた、古くから鉄をはじめとする種々の鉱物を産する宝の山であったのです。

また、修験道と鉱山が深いつながりを持つことは、今では常識となっているといいます。修験道は、もともと物質面から入る宗教で、水銀から得た金を飲み、身体を金と化して永遠の生命を得ようとする、練金術を重視した宗教であったらしいのです。

酒呑童子に率いられた鬼と呼ばれた人々は、鉱山師たちではなかったのか。古修験＝鉱山師たちが伝説の母胎なのではないかという村上さんの推論は、大江山の歴史に新たな光を投げかける魅惑的な仮説です。

元伊勢外宮

元伊勢と大江山

急速な都市化、機械化、情報化……の進展のなかで、現代人はともすると忘れがちなことですが、ほんのひと昔前まで、山は人々の素朴な信仰の対象でした。古来、山は天に近い聖なるところであり、水源であり、祖霊のすむところ、神の降臨するところと考えられてきたのです。大江山もまた、例外ではありませんでした。

大江山山麓には元伊勢と呼ばれる２つの神社（元伊勢内宮＝皇大神社と元伊勢外宮＝豊受大神社）があるのですが、この両社の歴史は、伊勢神宮の成立以前、古代天皇制の成立以前に遡ると考えられています。では何故、この両社が元伊勢と呼ばれるのか……その謎をめぐっては、超古代史研究者から様々な意見が提示されているのですが、ひとつはっきりしていることは、古代の丹後には独自のすぐれた文化が存在しており、丹後は畿内の勢力と拮抗するだけの力を持っていたということです。

やがて丹後はヤマト王権の支配下に組み込まれ、平安京の造営によって、丹波、丹後は都の影の地域になっていきます。そうした歴史が伝承の世界にも投影されて、神の棲む山・大江山は鬼の棲む山となっていったのかもしれません。

鬼をテーマに
ユニークな町おこし

大江山のふもとに広がる大江町では、現在、鬼伝説をテーマにユニークな町おこしが進行中です。北近畿タンゴ鉄道宮福線の大江駅を降りると、そのまん前は「鬼瓦公園」。公園内は、全国の鬼師（鬼瓦製作者）の鬼瓦が一堂に会する鬼の回廊に鬼の酒噴水、鬼の街灯に鬼のマンホールと、まさに鬼一色です。

河守鉱山の跡地は「酒呑童子の里」として整備され、1993年、その中核施設として「日本の鬼の交流博物館」がオープンしました。博物館には、「鬼とは何者なのか」「大江山の三つの鬼伝説」「日本の鬼瓦の推移」という展示コーナーのほか、多目的交流ホールも設けられており、この博物館を拠点に世界鬼学会も誕生したということです。長い眠りからさめ、突如、町のスーパーヒーローとして蘇った酒呑童子も、さぞかし光栄に思っていることでしょう。

●

いまは跡を辿るのさえ困難になってしまった大江山越えの古道・元普甲道を、それぞれの時代に、どのような人々が行き交っていたのでしょうか。いまは幻の峠となってしまった旧普甲峠は、どのような歴史をみてきたのでしょうか。大江山への旅は、歴史の謎とロマンへの想いをはばたかせる旅となりました。

＊なお、小式部内侍の歌にある大江山、酒呑童子の舞台となった大江山は、山城の国と丹波の国境にある老の坂（大枝山）を指すという説もあります。

資料提供：日本の鬼の交流博物館館長
村上政市さん
：大江町議会議員
水口健一さん

二瀬川渓流

鬼の岩屋